

安曇野市立豊科南小学校 開催要項

研究テーマ

授業と学校生活 その両面を子どもたちに『ゆだねる』学校づくりの挑戦

- 1 期 日 令和7年11月14日（金）
- 2 会 場 長野県安曇野市立豊科南小学校
- 3 共同研究者 信州大学教育学部 学術研究院教育学系 教授 伏木 久始 先生
- 4 日 程

12:30 12:45 12:50 13:25 13:30 14:15 14:20 15:05 15:15 15:45 15:50 16:30 16:40

受 付	移 動	開会行事	移 動	授業公開①	移 動	授業公開②	移 動	授業者と 語る会	移 動	座談会	閉会 行事
--------	--------	------	--------	-------	--------	-------	--------	-------------	--------	-----	----------

- (1) 受 付 12:30 ～ 12:45
- (2) 開会行事 12:50 ～ 13:25 （図書館）
 - ① 主催者挨拶 信濃教育会 馬淵 勝己 様
 - ② 会場校挨拶 安曇野市立豊科南小学校 校長 奥原 竜司
 - ③ 研究概要の説明
 - ④ 諸連絡
- (3) 授業公開
 - ① 4校時 13:30 ～ 14:15
 - ・ 2年2組（竹淵教諭） 国語「そうだんにのってください」（教室）
 - ・ 5年2組（萩原教諭） 総合「日本列島の小川の自然を守ろう隊プロジェクト」（教室・校庭）
 - ・ 5年4組（春日教諭） 総合「春日組事業グループの活動」（校内 詳細は授業案に記載）
 - ② 5校時 14:20 ～ 15:05
 - ・ 4年4組（高山教諭） 国語・社会「工芸品のみりょくを伝え合おう」（教室）
 - ・ 6年（住吉教諭 宮崎教諭 藤松教諭 鳥海教諭） 算数「比とその利用」（各教室・体育館）
- (4) 授業者と語る会 15:15 ～ 15:45 （2、4、5年は各教室、6年は6年3組）
 - ① 授業者の振り返り
 - ② 質疑
 - ③ 研究協議
- (5) 座談会 15:50 ～ 16:30 （図書館）

伏木先生，学校長，本校職員の鼎談方式でフロアも交えて議論します。
- (6) 閉会行事 16:30 ～ 16:40 （図書館）
 - ①会場校挨拶
 - ②諸連絡

- 5 その他
 - (1) 自家用車でお越しの方は、別紙駐車場案内をご覧ください、指定の駐車場をご利用ください。
 - (2) 上履き、飲み物は、各自でご用意ください。

安曇野市立豊科南小学校
教頭 小林 直也
TEL 0263-72-2154



校舎西側駐車場をお使いください。

駐車場への出入りは3か所ありますが、入口は①のみ、出口は②③をご使用ください。

駐車場と校舎の行き来は、必ず横断歩道をご利用ください。

ご協力よろしくお願いいたします。



豊科南小学校 教室等配置図



I 今年度の研究について

1 今年度の研究の背景と目的

本校では「根っこをのばす」という学校教育目標の達成に向けて、昨年度より全校研究テーマを「自らの考えを広げ深める～主体的で協働的な学びの実践～」として取り組んでいる。

昨年度の実践を通して、課題に前向きに取り組んだり、友とじっくり話し合いながら考えを深めたりする子どもの姿が多く見られるようになった。一方で、自分の考えや思いを表現することに苦手意識をもつ子どもが多く、見通しをもって粘り強く取り組むよりも、教師の指示を待つ傾向が見られた。



こうした子どもの姿を踏まえ、そもそも「子どもは自分の考えや思いをもつことができるのか」を問い直すことにした。「考えを広げ、深める」ためには、まず一人ひとりが学びの当事者としての意識をもち、自分の思いや考えをもっていなければならない。それがあってこそ、他者との対話や協働的な学びも成り立つからである。そこで今年度の研究では、「思いや願いをもって自ら学ぶことのできる子ども」を目指す子どもの姿として位置づけた。

2 研究のキーワード『ゆだねる』

私たちは、これまでのように教師が子どもに教える一斉授業を基本とする授業観のままだと、子どもが主体的に学ぶことは難しいのではないかと考えるようになった。そこで、教師が学びの主導権を子どもに任せる授業スタイルへの転換を全職員で意識し、実践できるようにしたいと考えた。その中で生まれたキーワードが『ゆだねる』である。

学びの主導権を子どもに『ゆだねる』ことは、私たち教師にとって不安を伴う。しかし、子どもが主体的に学び続けるためには、欠かすことのできない姿勢である。教師が子どもをコントロールするのではなく、学びの主導権を子どもに『ゆだねる』ことで、**失敗も含めて子どもと共に学んでいく姿を大切にしている**。年度初めの研究立ち上げの会で、奥原校長が「師弟共育」という言葉を私たちに紹介してくれた。まさにこの言葉の通り、子どもと教師が一緒に挑戦し、成長していく思いで研究がスタートした。

3 学校生活の中に『ゆだねる』場面を

研究のキーワードに『ゆだねる』を掲げたものの、どのように授業づくりをしていけばよいのか具体的なイメージをもつことが課題であった。そこで5月上旬、共同研究者である伏木久始先生をお招きし、職員研修を企画した。

職員の企画にあたって伏木先生と相談を重ねる中で、「授業方法を考える場になったとしても、根本的に教師と子どもとのかわりに変化は生まれないのではないか。授業以前に、生活の場で子どもに委ねられることがあるのではないか。」という助言をいただいた。私たちは、つい学び創造研究会に向けて授業づくりを考える思考に傾きがちであったが、『ゆだねる』ためには、教師自身が子ども観を転換する視点をもつことの大切さを改めて実感した。



そこで、研修テーマを「学校生活の一部を子どもにゆだねてみよう」とし、私たち一人ひとりが「信じてゆだねるとはどういうことなのか」を考えるきっかけとした。研修当日は、子どもが思いや願いをもって行動できるようにするために、どのようなことをゆだねることができそうか、またそのためにどんな手立てを講じられるかを、学年部会ごとにワークショップ形式で検討した。

ワークショップで実際に使用した各学年のシートはこちらの QR コードからご覧いただけます→



ワークショップを通して、「そもそも子どもは学校生活の中で、自分の思いや願いをもって行動することができているのだろうか。私たちは無意識のうちに、その機会を子どもから奪ってはいないだろうか。」と自らに問い直すことができた。『ゆだねる』ということに向き合う大切さを実感する機会となった。



生活の一部を子どもにゆだねるにあたり、6月の校長講話では奥原校長から全校児童に向けて「児童の皆さんが主人公の豊科南小にしていきたい。このチャレンジ成功のカギは、児童のみなさんにゆだねることです。」という話があった。

この講話をきっかけに、子どもたちの意識にも変化が見られるようになった。実際に高学年からは、次のような感想があった。

「先生たちに信頼されてうれしい。失敗しちゃうかもしれないけど、がんばってみたい。」

「今までは、きまりは自分たちでは変えられないと思っていたけど、校長先生の話聞いて自分たちでもやってみようと思った。」

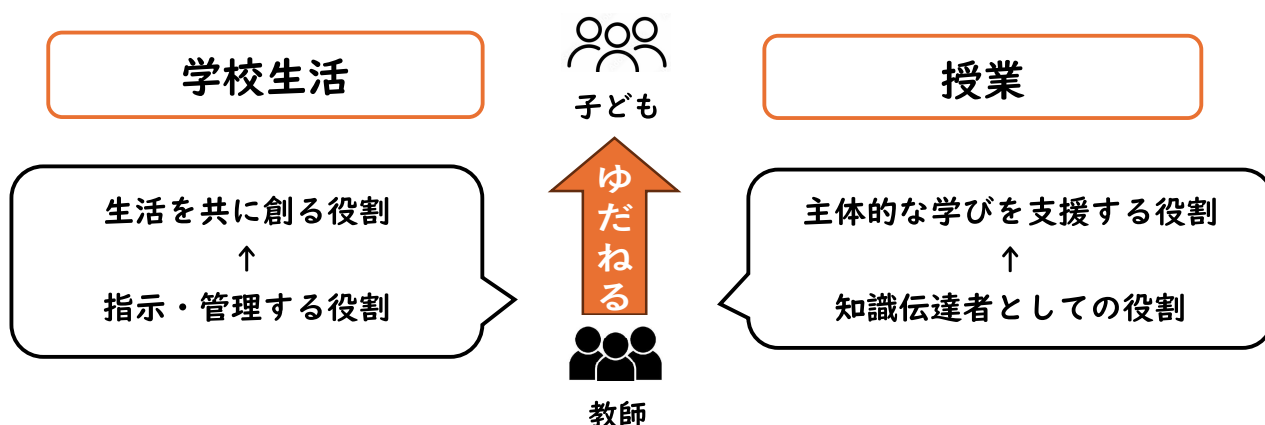
「先生たちが全部を決めるのではなく、失敗しても大丈夫だから自分たちでチャレンジしてみたい。」

また中学年では、学級での話し合いの中で、これまでゆだねられてきた運動会実行委員や総合的な学習の時間、係活動などの経験を振り返り、さらにこれから自分たちが挑戦してみたいことを話し合う姿も見られた。

このように、校長講話をきっかけに「子どもが主人公の豊科南小」をめざし、子どもと教師が共に挑戦していこうという雰囲気が学校全体に広がった。

—今年度の南小の挑戦—

【今年度、目指す子どもの姿】 **思いや願いをもって自ら学ぶことができる子ども**



4 1学期のあゆみ

(1) 学校生活の中で『ゆだねる』

3, 4年生の間で、休み時間のサッカーゴールの使用をめぐるトラブルが続いていた。時には小競り合いにまで発展することもあった。子どもから相談を受けた学年職員は、これまでもあれば曜日ごと使用日を決めるなど、教師が解決策を提示していただろう。しかし、今回はあえて解決を子どもにゆだねることにした。そこで、休み時間に子どもたち同士で話し合える場所を設けた。

第1回 自分の言い分を主張する子どもたち

〈3年生の主張〉

「3年がゴールを使えていない。」
「体育館使用なのに4年生が外も使っておかしい。」
「睨んでくるからいやだ。」



〈4年生の主張〉

「何も言っていないのに暴言を言うてくる。」
「ぶつかっても謝らない。」
「先に使っていたら諦めてほしい。」

第2回 みんなで楽しく使うアイデアを出し合う子どもたち

【教師の出】子どもの意見をボードに書く。



【教師の出】前回3年生の立場を尊重する発言をしていた4年生を司会者に推す。

「3, 4年で試合してみるの?」「3, 4年ごちゃまぜでやろう。」

「曜日で交代しよう。」

「暴言をしたらゴール使用禁止!」

第3回 複数のアイデアから多数決をとって決めようとする子どもたち

「使うゴールを別にする」15 票(主に3年生)

「3年も4年も両方使えばいい」16 票(主に4年生)

【教師の出】

「どうやって決めるかみんなで相談したかな?」

「多数決で本当にいいのかな?」

第4回 話し合いのめあてを確認し、みんなのことを考え話し合う子どもたち

【教師の出】話し合いの最初に目的を確認
「みんなは何のために話し合っているの?」



「自分のことだけでなく、みんなのことを考えた方がいいね。」

「『暴言を言わない』は絶対ルールに入れた方がいいと思う。」

「『暴言を言わない』を守れば楽しく遊べると思う。」

「暴言を言ったら禁止じゃなくて、謝って許してもらえばいいんじゃない?」

〈決まったこと〉暴言を言わない。(言ってしまったら謝る。許してもらう。)

ゴールは3年生も4年生も両方使えばいい。

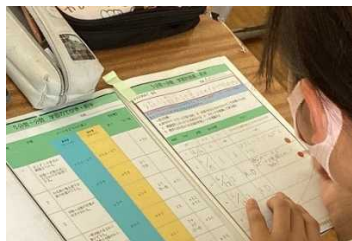
もし、教師が解決策を提示したり、話し合いに直接参加したりしていたら、ここまで時間はかからなかっただろう。私たち教師も、終わりが見えないことに不安や焦りを感じる時があった。しかし、子どもたちの中に生まれた「自分たちで決めることができた」という達成感や、当事者意識の芽生えはこの経験があったからこそである。実際に、これ以降、3・4年生の間でサッカーゴールをめぐるトラブルは起こっていない。

一方で、この話し合いを通して、「教師の出」の難しさも明らかになった。『ゆだねる』とは放任することではない。どのタイミングで、どのような声かけや支援をすればよいのか。ゆだねることの価値と難しさの両面を感じた出来事であった。

(2) 授業で『ゆだねる』

生活の一部を『ゆだねる』実践に継続して取り組んだ1学期だったが、同時に授業においても『ゆだねる』ことへの挑戦を始めた。6月には伏木先生と中信教育事務所指導主事の高橋堅先生を指導者にお招きし、校内で授業公開を行った。これらの授業実践を通して手ごたえと「ゆだねる授業の視点」が明らかになった。

①見通しをもつ【6年3組 算数「分数÷分数」より】



単元導入時に単元計画表を配布し、自分に合った学習計画を立てる活動を行った。自分の計画に沿って学習を進める子ども、友だちと協力しながら学ぶ子ども、教師に確認しながら進める子どもなど、それぞれが自分に合った学び方を選ぶ姿が見られた。授業の最後には、自分の進捗を確認し、今後の計画を調整する姿も見られた。

②子どもの意欲を引き出す導入づくり【4年4組 国語「新聞をつくろう」より】



社会科見学新聞を作るために、グループで紙面の割り付けを行う場面

紙面の割り付けを子どもにゆだねたが、多くのグループでどのように割り付ければよいか悩む子どもたちの姿があった。一人ひとりが「どんな記事を書きたいのか」という構想を十分にもてていなかった。つまり、「新聞を書きたい」、「〇〇に伝えたいことがある」という意欲やワクワク感が十分に育っていなかったといえる。このことから、子どもが単元の魅力を感じ、自分事として学びを捉える導入の工夫が不可欠であることに気づかされた。

③単元で学びを見通す【5年3組 算数「合同な図形」より】



きれいにしきつめられる図形の仕組みを追究する場面

本時で十分に考えを深めきれない子どもの姿をとらえた授業者は、授業の最後に、次時に本時の内容を持ち越す判断をした。次の時間には、前時で困ったことやわからなかったことを出し合い、思考を整理した上で、再び追究の時間を設けた。すると、前時にはあまり見られなかった問いに向かって粘り強く考える子どもの姿が見られた。この実践を通して、子どもの学びは1時間単位で完結するものではなく、思考がつながっていく中で深まっていくことを実感した。だからこそ、教師自身が単元全体を見通し、どの時間で何をゆだねるのかを構想することが大切であると気づかされた。

④授業を子どもと共につくる【2年2組 国語「あったらいいなこんなもの」より】



自分が考えた「あったらいいなこんなもの」を友だちに向けて発表する場面

本時の発表会に向けた準備として、どんな会にしたいのか、そのために大切にしたいことの「聞き方」、「話し方」、「質問の仕方」を子どもたちと一緒に考え、決めることをゆだねた。その結果、子どもたちは教師に「やらされる」ものではなく、自分たちでつくる発表会として意欲的に取り組んだ。この実践から、授業づくりの過程そのものに子どもを参画させることが、学びへの主体的な参加を生み出すことが分かった。教師が全てを整えた上でゆだねるのではなく、子どもと共に学びの場をつくる姿勢こそが『ゆだねる』授業の本質であるといえる。

I 学期の最後には、生活面と学習面の両方において各学年で『ゆだねる』実践の振り返りを行った。振り返り際には、教師の主観ではなく、具体的な子どもの姿をもとに成果と課題を話し合えるようにした。

各学年からは2学期に向けて次のような気づきがあった。

1, 2年	ゆだねる前提条件をきちんと整えることが、安心して学びにおくことにつながる。きちんと話し合う上でのやり方やルールをクラス内で共有することを大切にしたい。
3年	自分たちで学校生活の課題を見つけたり話し合ったりできる機会を設ける。ゆだねるための見通しをもてるようにする。役割分担を話し合いで決める。
4年	ゆだねっぱなしだと、おかしなことになったり子どもが途中で疲れたりしてしまう。教師の出（選択肢を挙げる・ゴールを確認する・今の状況を整理する）は必要。様々な考え方を「認める」ことを意識する。
5年	ゆだねるために子どもに見通しをもたせることが重要。その前提として教材研究や子ども理解、単元全体のデザインが必要。「こういうふうによればいいんだ」という見通しをもたせることが大事。
6年	全てをゆだねるのではなく、単元で考えてどの部分をゆだねるのか、なぜゆだねるのかを教師がもっておくことが大事。目的をはっきりさせてゆだねる。試行錯誤できる環境設定をする。

5 2学期のあゆみ

『ゆだねる』実践を積み重ねていく上で、私たち教師が共通の視点をもって研究に臨むことを目的に、夏休み期間に2回目の校内ワークショップを実施した。前回に引き続き、共同研究者の伏木先生にも参加いただいた。

I 学期の実践を通して、「子どもが見通しをもつ」ことが『ゆだねる』授業の前提となる重要な視点であると感じた私たちは、この研修で「単元のまとまりを見通した授業づくり（単元デザイン）」に取り組むことにした。具体的には次の3つの視点を共通理解として整理した。

【単元デザインの3つの視点】

① 子どもが単元の見通しをもてるように準備する

⇒単元導入時に、子どもと単元計画表や到達目標（ゴールイメージ）を共有する。

② 単元の魅力を探る

⇒子どもが単元にワクワクしたり、単元全体の内容を見通したりできるような導入を工夫する。

③ ゆだねる場面で“あの子”が夢中になって取り組める手立てを考える

⇒どの子も参加し、意欲的に学べる授業を目指す。

ワークショップでは、学年部会ごとに実際に2学期の単元を扱って、単元づくりに取り組んだ。単元全体を見通すことで、どの場面で、何のために『ゆだねる』のか。また、そのためにどの時点でどのような基礎的な力を身に付けておく必要があるのかを具体的に考えることができた。また、単元のねらいを明確にもった上で、協働的に単元をデザインする姿が見られた。

学習面では、この研修で共有した3つの視点をもとに、各学年で『ゆだねる』実践を進めている。実践を重ねる中で、ゆだねることの効果や難しさ、またゆだねやすい単元、そうでない単元の違いにも気づくようになってきた。さらに、単元全体を見通した上で、どこまでを教師が支え、どこから子どもにゆだねるかという視点をもって日々の授業改善を図っているところである。（詳細は各学年の事前資料参照）

生活面では、運動会や宿泊行事などで、実行委員を中心に子どもが自分たちで企画・運営を行う姿が多く、学年で見られるようになった。一例として、運動会の準備体操が挙げられる。例年はラジオ体操に取り組んでいたが「ラジオ体操でいいかな？」と教師が子どもに投げかけたところ、子どもたちから「徒競走の準備になる体操をしよう」という意見が出され、自分たちで体操を考え、提案し、行動する姿があった。また、日常生活の場面でも、各学年で次のような『ゆだねる』実践が行われている。

1年	給食準備、着替え、背の順決め	4年	席替え、運動会学年種目
2年	トラブルの解決	5年	学年実行委員会、朝の会
3年	清掃、運動会学年種目	6年	児童会、運動会、音楽会、班決め

各学年の生活にゆだねる実践の詳細はこちらの QR コードからご覧いただけます→



6 学び創造研究会において

私たちの目指す「子どもが主人公の南小」を実現するための、子どもに『ゆだねる』営みは、まだ始まったばかりです。今回の公開を通して、これまでの実践の成果を感じ取っていただければと思いますが、これは決して到達点ではありません。今回の公開授業も途上であり、私たちは明日からも『ゆだねる』実践を積み重ねていく「実践者」として歩み続けていきます。

なお、次項からの各学年の指導案には、本時案を掲載していません。これは、公開授業の出来栄えにとらわれるのではなく、単元を通した授業づくりを重視している私たちの姿勢の表れです。この点も含めて、実際に参観いただき、忌憚のないご意見、ご助言をいただければ幸いです。

【学年】 豊科南小学校 第2学年 授業学級（2年2組）授業者（竹淵 匡瑛）

【単元名】 教科：国語「そうだんにのってください」（9時間扱い）

【育成する資質・能力】

〔知識・技能〕	〔思考力・判断力・表現力等〕	学びに向かう力・人間性等
共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。（知(2)ア）	互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐことができる。（思A(1)オ） 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。（思A(1)ア）	相談事の解決に向けて、進んで話し合いに参加しようとしている。 話し合いのグルーピングの際に、自分で考えたり、周りの状況を見て行動したりしている。

【主な学習活動 と ゆだねる場面の構想】

【本単元で「ゆだねる」場面に係る既習内容・経験・実態】

6月24日（火）の事前授業にて「あったらいいな、こんなもの」

1学期の授業の中で、子どもたちどうしでの話し合い活動を中心に行ってきた。その中で、相手の気持ちを考えた話の聞き方や話し方を考えてきた。教師に言われたことをするのではなく、実際に自分たちでやってみることで見えてきた課題を確認し、次の活動に生かせるようにしてきた。

話し合いの中で、子どもたち自身が気づいた課題

- ・友だちの話を最後まで聞くこと
- ・相槌をうつこと
- ・違う話をしないようにすること
- ・うまくいかないときにけんかをしないようにすること
- ・ちょうどいい声で話すこと

毎時間の最後には振り返り、授業の最初には前回感じた思いの共有をすることで、周りの友だちの思いを知り、相手に思いを寄せた話し合いの経験を積んできている。また、単元の終盤には、話し合いのグルーピングを子どもたちに委ねてきた。話すのが得意な子や苦手な子も混ぜた編制、まだ話し合いをしていない子と話し合いをするグループを考えること等、グループ編制を自分たちで考えることで、より主体的に話し合い活動に参加している様子であった。こういった委ねる場面が増えると、子どもたちどうしでのトラブルも多々あった。そういったトラブルも、相手の気持ちを知り、時間はかかるが解決に向けてどうしていけばいいかも、少しずつ学んできている。1学期の話し合いの学習で積んできた、「相手に思いを寄せた話し合い活動」、「円滑な話し合いに向けたグループを考えるような経験」を生かしながら、本時に向けて活動を進めていけるといい。

本単元で、子どもたちに身につけさせたい主な力（国語）

- ・友だちの話を最後まで聞くこと
- ・話をつなげる言葉を意識して使う
- ・自分の考えを伝える

【この学習活動で、ここを、このように、「ゆだねてみよう】

ゆだねる構想

①話し合いの進め方や、話し合いで大切にしたいことを子どもと共に決める

今までの話し合い活動で、実体験により経験してきた思いや学びを想起し、より話し合いに参加するすべての人が気持ちよく話し合いができるためのポイントを子どもと共に決める。共に学ぶ相手に思いを寄せて考え、自分たちで決めたことに向けて、学習に主体的に向かう姿を期待したい。

②話し合いのグループ編制

前回の話し合い活動の中で、自分たちでグループ編制を行った。そうすることで、決められた活動をするのとは違い、子どもたちは自分たちで話し合いを進め、より満足感をもって活動に臨むことができていた。そこで、今回は、グループ編成の際に、より円滑に話し合いが進むよう、話すのが得意な子も苦手な子も一緒に参加できるようにと、自分たちで考えて、周りの友だちのことを理解し、グルーピングができるようにしていきたい。



【ゆだねられたときに、主体的に関わろうとする姿が生まれるためのエネルギーになるような導入や手だて】

- ・事前に自分の困りごとのアンケートをロイロノートでとり、実際に周りの友だちが悩んでいることを知ったり、自分自身と重ね合わせたりすることで、より身近に感じることができるようになる。
- ・「あったらいいな、こんなもの」のときに、気持ちのいい聞き方や相手に伝えるための話し方を学習してきている子どもたちなので、その時に感じた、聞いてもらうことの心地よさを思い出し、本単元につなげる。
- ・相談したのに思うような対応をしてもらえない経験を想起することで、対応する難しさを学ぶ大切さを意識づける。

時間	学習活動 「ゆだねる」を意識した学習	支援 ゆだねるに係る支援
1	単元の目標を確認して学習の見通しをもつ。	授業スライドを使って、今まで相談をしてよかった経験や、相談したのに思うように解決をしなかった経験を想起させて、上手な相談の乗り方が必要だと気付かせる。
2	教科書 P37「わだいを考えるときは」を参考に、友だちに相談する話題を決める。	- 事前に、悩みごとを子どもたちにロイロノートでアンケートをとり、相談事を何にしようか悩んでいる子どもの参考になるように掲示する。 - 相談内容をいくつか挙げ、クラス全体で話し合って解決するようなものではなく、個人の悩みを扱うことを共有する。
3	話し合いの進め方を、動画を視聴して確かめ、どんなことに気をつけて話し合えばいいかを考える。	二次元コードの動画「話し合いののれい」を準備し、場面ごとの話し合いの進め方について、スライドで映しながら確認することで、話し合いで大切にすることに気づかせる。
4	代表の子の悩みを受け答えする様子をみんなで確認し、話し合いの進め方のイメージをもったうえで、話し合いをする。	- 話すのが得意な子や苦手な子を混ぜて、モデルグループを編成する。 - みんなが共感しやすい悩みを選ぶ。 - 相談する→解決策を考える→順番に解決策を挙げる→比較・検討する→相談者がアイデアを決めるという手順を掲示しておき、受け答えの様子を見ながら確認する。
5	- 実践してうまくいかなかった悩みを確認して、ビンゴカードを作る。 - グループで話し合う。 - 次回のグループを決める。	- 前回の「あったらいいな、こんなもの」のときの経験をもとに、トラブルへの対処の仕方や友だちへの言い方、話せない子どもへの関わり方等を共有し、よりよい学びに向かう姿を目指すことを確認する。 - 話し合いを行っていく中で悩みが見えてくる。その悩みをビンゴカードに追加していく。子どもと共に、ビンゴカードに入れる悩み（言葉）を考えるようにする。
6 7 8	- グループ編成の際に、話すのが得意な子も苦手な子も含めてグループ編成をする。 - 自分たちで考えたグループで話し合う。（本時）	- グループ編成については、今までの学習の中でも繰り返し子どもたちの力で編成してきている。その中で、うまくグループに入れない子、なかよし同士等になることがあり、その都度どんなグループ構成がいいのか考えさせてきた。 - 授業の最後に、やってみて困ったことや友だちの素敵な姿を全体で共有する時間をつくり、どの子も安心して、活動に取り組むことができるようにする。 - 毎時間、ふりかえりをして、次時に共有をする。

【これまでの学習でこんな姿を見せていたあの子が、「ゆだねた」この学習活動で、主体的な活動ができるようにと考えた手だて】

・A 児の現状

学習活動に長時間参加することが難しい。人の話を最後まで聞いていることができない。学習全般において、学習意欲が低く、面倒くさくて「やりたくない」という思いが強い。

・A 児への手だてとゆだねられた場面で臨む姿

おそらく自分の困っていることを想起する場面から「困っていることはない」というスタートになる。そこで実際に今までで困っていた場面と一緒に考えたり、友だちの悩みごとに触れたりすることで、自分の困り感を実感して、この学習をすることが自分に役立つと意識することで、意欲的に取り組めるようにしたい。また、一方的に「これをやりましょう」といった指示ではより気持ちが向かないため、話し合いでのポイントを子どもたちに委ねることで、「自分たちで決めたことだから頑張りたい」「トラブルなく、温和的な空気で関わり合いたい」という思いが生まれることが予想される。話し合いのメンバーも、自分の意志で決めることで、友だちの話に耳を傾ける姿が増えるようになるという。

【学年】 豊科南小学校 第４学年 授業学級（４年４組） 授業者（高山賢司）

【単元名】 工芸品のみりょくを伝え合おう（１９時間扱い）

【単元目標】 <本単元で期待する具体的な児童の姿>

（教科：国語）単元：「工芸品のみりょくを伝えよう」

- ① 図書館の本，デジ図書，インターネットなどを活用して，調べたい工芸品の資料を見つけ書き留めることができる。また，自分や友だちの書き留めた語句や文章の中から，４年生が理解できにくいものを見つけ合い，話し合ったり辞書や事典を使ったりして他の同意語句に変えることができる。
- ② 「なぜその工芸品を未来につなげたいと感じたのか」を明確に言葉にして，リーフレットの書き方に沿って文章に表すことができる。
- ③ 工芸品の特徴や魅力など，自分が相手に伝えたいことを，短くわかりやすい言葉で表すことができる。

（教科：社会）単元：「残したいもの伝えたいもの（歴史にはぐくまれた伝統的な工業）」

- ① 伝統的な工芸品は地域の特徴や文化に根付いているもので，古くから受け継がれてきた技術や思いが込められていることがわかる。
- ② 図書館の本，デジ図書，インターネットなどを活用して，調べたい工芸品の資料を見つけ書き留めることができる。
- ③ 工芸品に込められた人々の願いや努力をまとめ，リーフレットにして発表することができる。

【主な学習活動 と ゆだねる場面の構想】

◎どんな場面でどんなことをゆだねてきたか（１学期から今日までの授業場面での様子）

- ・国語「本のポップや帯を作ろう」では、「ポップや帯を見た人が，本を手にとってみたくなる」ことを第一に考え，自分で紙の大きさや形，色，書く内容を考えて作成した。
- ・社会「長野県について調べよう」では，長野県の学習の導入時に，自分の気になることを資料集や本，インターネットを使い自由に調べ，発表する時間をとった。児童の発表や調べた内容から次時の課題を設定し，長野県の学習を深めた。
- ・図工「まぼろしの花」では，水彩絵具を使って描くことをそろえ，自らのテーマに沿って下描きをするかしないか，鉛筆で書くかクレヨンで描くかを考え，それぞれ自由に描いた。
- ・ビデオ教材の視聴をした際に，イヤホンがなくて多重音声になってしまうため，自分が聴きやすい場所（校内どこでも）を選び，移動して視聴した。自分で理解できたら教室に帰ってくることにしたところ，それぞれ内容を捉えたと思ったタイミングで教室に戻ってきた。
- ・自主学習の時間３時間を設定し，教科と学習内容を提示して，学習の順番と時間配分をゆだねた。

◎４年生の現段階でのこれまでの「ゆだねる」挑戦から得られたもの

- ・やることははっきりしていると，計画的意欲的に学習を進められる。（見通しをもたせる必要性）
- ・必要感がもてれば，自分事として学習に集中して取り組める。ふざけてしまったり目的とは異なることに時間を費やしてしまったりすることが少なくなる。（児童の興味関心の重要性）
- ・時間の使い方を自分で考えて行動できる児童がいる。一方で，空いた時間の使い方が上手いいかない児童がいるので，状況に応じて教師の助言があると効果的である。（隙間時間の使い方の支援）
- ・実践を重ねてきたことで，児童自身が「ゆだねる」を意識している。ゆだねられていると思うとやる気に繋がり，進んで取り組む姿が多く見られる。（ゆだねる活動と学習意欲の繋がり）

【この学習活動で，ここを，このように，「ゆだねてみよう」】

自分が感じた工芸品の魅力を，「自分が作成したリーフレットを読んだ人にも感じてもらう」という目的を達成するために，教師から提示するのではなく児童自身がリーフレットの構成の仕方を考えてみる。

また，リーフレットの完成までの計画・見通しを自分で立てていく。

【ゆだねられたときに、主体的に関わろうとする姿が生まれるためのエネルギーになるような導入や手だて】

- ① 実際の工芸品を味わう。(学校にある物や自分の家にある物を持ち寄って、身近な物から興味をもつ)
 ② 自分の地域や県の工芸品。伝統工芸品と工芸品のちがいに触れる。

単元構想 (段階)	時間	学習活動 「ゆだねる」を意識した学習活動	支援 ゆだねるに係る支援
残したいもの 伝えたいもの (社会)	2	① 北信・東信・中信・南信に分け、長野県に古くから残るもの(建物・祭り・ものなど)を調べる。	
長野県の 特色ある地域 木曾漆器(社会)	3	① 木曾漆器について学習する。伝統工芸品や伝統マークを知る。 ② 未来につなげる木曾漆器作り ③ 長野県にある伝統工芸品について調べよう。	・工芸品と木曾漆器については、全員が一緒に学習する。 ・「のびゆく郷土」をもとに、自分の調べたい工芸品を詳しく調べられるようにする。
未来につなぐ 工芸品(国語)	2	① 教科書の教材を読む。 ② 「一人の職人」になって伝えよう。	
工芸品を 調べよう(社会)	3	紹介したい工芸品を選び、インターネットなどでくわしく調べる。	・「歴史」「盛んになった理由」「作り方」「未来へつなげるための取り組み」などが記述できるようにワークシートを用意する。 ・子どもたちから提案があれば、PC内にメモしてもよいとする。 ・調べたことをそのまま書くのではなく、自分の言葉でメモをするように促す。
	1	① 教科書を読み、リーフレット(B4表表紙・内側・裏表紙)で、工芸品の魅力を伝えることを知る。	・リーフレットについて調べる。 ・様々な折り方(2つ折り・3つ折りなど)についても考えられるように促す。 ・リーフレット・パンフレット・チラシの違いに気が付くように促す。
工芸品の みりよくを 伝えよう (国語)	3	② 調べたことを整理して、共通して書くことを話し合って決める。 ・誰に対してリーフレットをつくるのか確認する。 ③ 調べた工芸品の魅力をみんなにリーフレットでどのように伝えるか、工夫やリーフレットの設計図(組み立て)を考える。	・折り方と書く内容が対応することに気が付くように促す。 ・「1つの工芸品について詳しく書く」「テーマにそっていくつか書く」など、自由に決めてよいことを確認する。 ・下書き用の白紙に、どこに文や写真、絵をかくか、組み立てを考えることができるようにする。 ・下書き用の紙はいろんな種類を用意し、児童が自分で選べるようにする。 ○何を書こうか困っている児童には、選んだ工芸品のどこを良いと思っているかを確認し、そこから書けるように促す。
	1 本時	④ 下書きで組み立てが決まったら、読みあって文章や構成を検討する。 ・アドバイスもらったところを修正したり付け加えたりする。	・下書き用にした組み立てを見合う中で、工夫した点や要約する上でのポイントを児童間で共有することができるようにする。 ○実際に「リーフレットを手にとってみたいか?」「読みやすいか?」「その工芸品をすてきと思えるか?」などのポイントに、児童同士で気づけるように促す。
	2	⑤ 本番用の用紙に、リーフレットを作成する。	・PCを使って作る方法についても、児童から申し出があったらできるようにしておく。
	2	⑥ お互いの作品を見合い、感想を伝え合う。 ・完成したものは実際に掲示する。	・完成した作品のよさや工夫に気づくことができるように促す。

「ゆだねる」の追究 総合的な学習の時間の活動の中で、子どもはどのように「根っこ（主体性）、（非認知能力：意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心ある、創造性、コミュニケーション能力）を伸ばす」姿を見せるか

【学年・組】 ５年２組 担任 萩原 達也

【単元名】 学校ビオトープ 日本列島の小川の自然を守ろう隊

【活動場所】 教室、学校ビオトープ 日本列島の小川

【単元の目標】 学校ビオトープに何が必要かを考え、計画を立て、自分たちの力で取り組む各プロジェクトの活動を通して子どもたちが主体的に取り組むこと（ゆだねられ活動すること）のよさを知る

【主な学習活動とゆだねる場面の構想

1、子どもの実態と本単元で願う子どもの姿

本学級の子どもたちは、年度当初に書いたキャリアパスポートの記述を読むと、学校ビオトープを学校の大切な自然環境だと感じている。子どもたちは学校ビオトープで休み時間に休んだり、鬼ごっこなどをする遊びの場所としたりして親しみ、清掃の時には学級全員が週替わりで日本列島の泥あげに取り組むことで学校ビオトープに繰り返し関わる実態がある。

しかし、学校ビオトープは、多様な生態系が生息する空間であり、自分たちも関わることで環境を創造し環境保全していく場であることを実感している子どもは多くない。そこで、子どもたちの捉える憩いの場や遊びの場としての学校ビオトープの姿を尊重しながら、プロジェクトごとの学習を核に横断的に総合的な学習を行い、特定の教科の視点だけでは捉えられない学校ビオトープの広範な事象を多様な角度から俯瞰し、子どもたちが探究的な見方・考え方を働かせながら学び、学校ビオトープに繰り返し関わり、社会参画する姿をめざす。

2、これまでの学習においてのゆだねる実践

学年では、学年会や運動会の実行員会を発足し、子どもたちに「ゆだねる」場面を継続して作っている。また学級の朝の活動では学級委員が「朝のめあて」をクラスの全員で話し合い決めたり、朝の一分間スピーチで、子どもたち同士がたずねあいをしたりする時間を設けて、「ゆだねる」実践に取り組んでいる。学級総合ではプロジェクト会議を行い、自分が追究したいテーマを選び、プロジェクトチームを発足させ、学習活動を「ゆだねる」ことに取り組み始めた。このように子どもたちに学びを「ゆだねる」ことで、いきいきと学習に取り組む姿が見られる。一方でどのように取り組んでいけばよいかとまどう姿もみられたため、「ゆだねる」ためには、絶えず見通しをもたせることが大切である。見通しをもたせることの肝要は、校内の事前研究においても指導主事から指導を受けている。

（１）見通しをもつ・・・プロジェクト発足に際して子どもたちが見通しをもてるように次のステップで学習を組織していった。

①子どもたちで話し合い学習活動を決め出す

総合的な学習の時間の学習の活動に学校ビオトープを散策したり、５月１９日に学級で泥あげをしたりした。その後、取り組みたいことを子どもたちと５月２６日にクラス会議で話し合い、多様な意見が出た（右図１）。大きな枠組みとして、「みんなが遊べる遊具を作る」「ゆったりできるところを作る」という大きな枠組みができた。

②子どもたちの提案した学習活動を軸にテーマを練り上げていく

テーマを決め出していく過程では、「日本列島」や「自然」は欠かせないという議論があり、「日本列島の小川の自然を守り隊」がスタートすることとなった。

③子どもたちがプロジェクトを作り、エデュスクラムシートでゴールとプロセスを確認

６月９日にプロジェクト立ち上げ会を行った。必要な学習活動をもとに５つのプロジェクトが組織された。「エデュスクラムシート」を活用し、子どもたちが見通しをもって学習に取り組める環境づくりに取り組んだ。２学期に入り、学習が停滞するプロジェクトがあり、メンバーの移動を含めて１０月２０日に再組織化した。



（２）各プロジェクトごとの学習活動

- ・木の遊び場プロジェクト（仮称） 木材で全校のみんなが親しめる遊び場づくりに取り組む
- ・木の憩いの場プロジェクト（仮称） 東屋を設計し、憩いの場づくりに取り組む
- ・看板づくりプロジェクト（仮称） ビオトープの季節の動植物などを知らせる看板のづくりに取り組む
- ・水プロジェクト（仮称） 水質調査、マイクロプラスチック、流速改善などに取り組む
- ・ジャコウアゲハプロジェクト（仮称） 安曇野市の絶滅危惧種を飼育しチョウの舞うビオトープに取り組む
- ・動植物図鑑プロジェクト（仮称） 学校ビオトープの動植物の調査および図鑑化に取り組む

（３）各プロジェクトごとにゆだねる学習活動と手立て（学習の方向性を示す）

- ・木の遊び場プロジェクト（仮称） 地域の工務店の方に参画していただき制作可能物の目処を立てる
- ・木の憩いの場プロジェクト（仮称） 「さとぽろ。安曇野市再生計画」に間伐材の活用可能性をヒアリング
- ・看板づくりプロジェクト（仮称） 何のための誰のための看板か、意識させながら制作活動を行う
- ・水プロジェクト（仮称） ビオトープを流れる水の流域、マイクロプラスチックとの関連を図る
- ・ジャコウアゲハプロジェクト（仮称） 幼虫の生育と食草から地域史や生態系への視点を広げていく
- ・動植物図鑑プロジェクト（仮称） 図書館所蔵の過去の制作物や他校の実績を手がかりに取り組む

【ゆだねられたときに、主体的に関わろうとする姿が生まれるためのエネルギーになるような導入や手だて】

映画「マイクロプラスチック・ストーリー～ぼくらが作る２０５０年～」を視聴した。子どもたちは、NYの小学校５年生がプラスチックによる環境汚染についての探究学習を通して解決に向けて行動していく姿に感銘を受けた。学校ビオトープの散策後、自分たちの学校ビオトープで自分たちができることはないか考え始めるきっかけとなった。

「ゆだねる」の追究 総合的な学習の時間の活動の中で、子どもはどのように「根っこを伸ばす（主体的に取り組む）（非認知能力〈意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心ある、創造性、コミュニケーション能力〉を伸ばす）」姿を見せるのか

【学年・学級】 ５年４組 （児童数２８名） 担任 春日三千郎

【単元名】 総合的な学習の時間 「春日組事業グループ」

【単元の目標】

各事業グループの活動を通して、子ども達が主体的に取り組むこと（ゆだねられ活動すること）のよさを知る。

学校のためになる活動について知り、その活動に向かって計画をたて、自分たちの力で取り組むことができる。

【主な学習活動 と ゆだねる場面の構想】

１．児童の実態と本単元で願う児童の姿

本学級は５学年より新たに編制された。本学級は、Ａ児（キレやすく暴力あり学力不振）とＢ児（多動、授業中の立ち歩き等）を同じクラスにしたことに関わり、編制上の児童の傾向性がある。

Ａ児に対応できる児童：①基本的に動揺しない②Ａの行動を見切って関わらない③Ａのよさを知っていて理解がある

Ｂ児に対応できる児童：①Ｂの行動に誘発されて行動しない②Ｂの行動を見守り必要に応じて注意、支援できる

そのため、学級編制時の児童の様子は、他のクラスがリーダー性ありの児童４～５人の中、本学級は７人を配していた。しかし４学年のＣＲＴ 国語、算数の総合到達度は最も低いという構成となった。「何があっても反応しない、流されない」という児童の構成は、学力的には総合的に上位の児童と、学力的には低位で、無関心か明確に意思表示しない児童という、両極の組み合わせになっている。

こうした２極化しているクラス内の児童間の学習活動支援の方向としては、「分らなければ聞く、聞かれたら支援する、困り感のある仲間気づいたら支援する」という方向で行ってきているが、これらの２通りの傾向性のある児童は、学習上、学校生活上の課題を以下のように挙げることができる。

①学力が高く自己表現が得意な児童

知的な判断は早い、仲間を理解し、それぞれの個性を活かしながら共に活動することが苦手。

②学力が低く自己表現が苦手な児童

自分から行動することが少なく、できればさぼりたいか、仲間とダベっていたい。

合わせて、ＡやＢとともに学校生活を送っていくためには、「一日に１時間でも体を動かす活動をして体のエネルギーを発散しないと、安定してその他の学習活動や学校生活をおくることができない。」というＡやＢの特殊な事情への対応が必要となる。ＡやＢのいる学級の子どもたちがＡやＢとともに過ごす学校生活の中で、協働し主体的に行動できる学習活動をめざして、本単元が構築されてきている。

２．これまでの学習においてのゆだねる実践

「ゆだねる」ためには、「見通し」が大切であることを、校内の事前研究において指導主事から指導を受けた。

（１）見通しを持つ

総合的な学習の時間の学習活動の目標（活動をする誘因になるもの）を、学級としては「スイカ割り」「流しそうめん」をすることに置いた。この案はＡが言い出し、Ｂが賛同して目標となった。特にＡとＢについては、「スイカ割り」「流しそうめん」は、「学校の役に立つ活動」の「ごほうび」であることを見通しとしてもちながら活動を行うことを確認した。

（２）各事業グループごとの学習活動

- ・ＴＯＭＯ 建設 ＡとＢが所属。学校の役に立つ工事の請け負い。
- ・百瀬コンクリート ＴＯＭＯ 建設と連携、または単独で窠づくり等、コンクリートでの作業を行う。
- ・ＵＳＩＯＮＡＲＩ 農業 畑での栽培活動、畝づくり、草取り等の作業を行う。
- ・カラフルベジタブル 畑等の作物を収穫し、保護者及び学校職員へ販売。「流しそうめん」等の資金作り担当。
- ・ＲＩＫＯＮＡ 園芸 畑に敷くため藁を編む。卒業式・入学式用の花（パンジー）の栽培
- ・ことまるデザイン 各事業グループの取材、お便り作り。野菜等販売用のチラシ等の担当。

(3) 各事業部ごとにゆだねる学習活動と手立て（活動の方向性を示す）

- ・TOMO 建設 Aの目的意識を持続させるためにAの両親（建設会社経営）に資材等をお願いしAの意識を高める。
- ・百瀬コンクリート 「流しそうめん」を煮るための竈作成という目標に向け、活動時間ごとにやるべき仕事を決める。
- ・USIONARI 農業 その時間の作業内容（畝づくり、草とり、種まき、収穫等）を明確にし、作業を行う。
- ・カラフルベジタブル 収穫等を行い、そのパッケージや販売について考えながら販売活動を行う。
- ・RIKONA 園芸 パンジーの栽培を種まきからどのようにするのかをタブレットでよく調べて活動を行うようにする。
- ・ことまるデザイン 各事業グループの記録を残し、週一回の家庭へのお便りをまとめる。カラフルベジタブルの販売活動のチラシやパッケージデザインなどを連携して行う。

ゆだねる：任された事業グループで、仲間とともに（何を、だれと、どこで、どんな方法で）判断し活動す

月	TOMO 建設(T, S 所属)	百瀬コンクリート	USIONARI 農業	カラフルベジタブル	RIKONA 園芸	ことまるデザイン
4	学級会で、総合的な学習の時間のゴールが「スイカわり」「流しそうめん」を行うことにきまる。この二つは、学校の約に立つ活動を行ったごほうびとして行うことを確認した。また、活動の資金については、畑の作物の販売（保護者、職員）によって実現されることを確認。 ①資金作り⇒販売事業、畑の作物づくり事業、 ②流しそうめんの実施⇒ナベでそうめんを煮る竈づくりが必要 ③ごほうびとしての「スイカわり」「流しそうめん」⇒学校の役に立つ作業をみつける					
5	TとSが校長先生に学校の役に立つ仕事を聞きに行く →日本列島の排水のU字溝工事を依頼される。 Tの父親にU字管を依頼する(3本)	日本列島の水路が大木の切株のためにU字溝が盛り上がり、排水困難になっていた。その部分の解消のため、当初はクラス全員で排水路部分の不要な土を掘る作業を行った。			週1回の学級だよりの発行。	
6	U字管埋設のために切株の根を切り平らにする作業を行う	そうめんをゆでるための竈を作るために校内の石を集める	ジャガイモの収穫 サツマイモの植え付け。畑の畝作りマルチ敷き。	ジャガイモの収穫 収穫したジャガイモの仕分けとパッケージ。 販売⇒保護者と学校職員へパッケージし、販売。	ジャガイモ販売のためのチラシ	作業の様子を取材
7	U字溝を2本はめこんで工事を終了する	石を組んでコンクリートで固める	野菜の植え付け(スイカ、ミニトマト、ピーマン、ナス、オクラ) 大根のたねまき	ミニトマトの収穫と販売(学校職員へ)		各事業グループを取材
8	TとSが校長先生に学校の役に立つ仕事を聞きに行く →百石堰の水車づくりを頼まれる。	石を組みコンクリートで固め、竈を作る	サツマイモの収穫	サツマイモの収穫 パッケージ、販売 ⇒保護者と学校職員へ	畑のスイカ用に藁を編んだものを作る	サツマイモ販売のためのチラシ
9	8/25 畑でとれたスイカを使って、スイカ割りをする。					
10	百石堰のこれまでの水車をTの父の建設会社の人に頼み撤去9/23。 撤去後の保存作業と、新水車づくりのための作業 流しそうめんの竹を組む	竈づくり。	畝づくり。 大根の種をまく 毎朝、万田酵素を散布。 畝作り	ブルーん拾い →乾燥ブルーんを作り、販売 ミニトマト、ピーマン、ナス、オクラを収穫し、職員に販売 ギンナン拾い	パンジーの栽培について調べ、種をまく。	ブルーん販売のためのチラシ
11	水車づくり。 竈の火入れ ピザ窯の補修。 流しそうめん準備	そうめん用竈づくりとピザ窯の補修。 流しそうめん準備	大根の栽培収穫。 次に向けての畝作り	ギンナンの製品化と販売 大根の販売 流しそうめん準備	卒業式・入学式に向けたパンジー栽培	ギンナン大根販売のためのチラシ
本時	11/6 竈でそうめんをゆで、流しそうめんを行った。					
（予定）	(バス乗り場方面) 水車づくり。 ピザ窯の補修。 竈の火入れ。 (何かを煮るか揚げる)	(バス乗り場方面) ピザ窯の補修。 竈の火入れ。 (何かを煮るか揚げる)	(畑) 畝作り (高畝をつくる)	(教室・校庭) ギンナン拾い 製品化 販売	(教室) パンジーの世話	(教室が取材) 学級だよりによる各事業の情報発信と記録活動の継続

【学年】 豊科南小学校 第6学年（児童125名）

【単元名】算数科「比とその利用」（8時間扱い）

【単元目標】

比について、その表し方や比の値、等しい比の意味を理解し、割合が比で表された問題を解決することを通して、割合の見方・考え方を深めるとともに生活や学習に活用しようとする態度を養う。

【主な学習活動 と ゆだねる場面の構想

1 算数の授業での児童の実態と本単元の願う児童の姿

本学年の児童は、算数の授業では、板書を丁寧に写したり、出された課題に真剣に取り組んだりする姿が見られる。しかし、発問に対して、指名をすると自分の意見を発言するが、自分から進んで発言する児童は固定化されている。また、関わる友だちが固定化し、多様な考えにふれる機会が少ない。CRT の結果では、関心・意欲・態度は全国並みだが、知識・技能、思考・判断・表現は全国と比べて低い。また、中間層が少なく、学力差が大きい学年である。

6 学年として、児童が主体的に取り組む姿とは、「自分の願いや課題について考え、自分自身を知る」そして「自分に合った方法で願いを実現したり、課題を解決したりする」姿だと考える。算数科においてもそういった姿をめざしていく。

2 これまでの学習におけるゆだねる実践

児童が自分の願いや課題を知るために、単元のはじめに単元計画を提示し、学習の見通しをもたせてきた。単元目標を確認した後、学習の進捗・場所・方法・道具などを児童自身が選択し、自分に合った学習方法を模索する活動を取り入れた。

また、算数の課題を解決するために「誰と・どのように」学ぶのかを児童が考え、主体的に選ぶことを重視した。その結果、友だちとの関わりを通して多様な考えに出会い、学びの楽しさを感じる児童の姿が多く見られた。

ふりかえりでは、「自分で進めて主体的に学べた」「友だちに教えて喜ばれたことがうれしかった」「いろいろな人と関わって学ぶのが楽しかった」など、意欲的な感想が多く聞かれた。

3 本単元のゆだねる内容と手立て

2 学期からは、運動会で学年全体が協力して取り組む活動や、中学校進学に向けたクラス替えを見据え、より多様な友だちと関わる機会を重視している。そこで、本単元では算数を中心教科とし、他教科とも関連づけながら学年全体で主体的に学ぶ活動を設定した。

児童が見通しをもって学習を進められるよう、単元計画やふりかえりシートを学年で共通化した。また、自分で学習方法を選ぶことが難しい児童に対しては、「どのようなことがゆだねられているのか」を視覚的に示した《ゆだねるものさし》を活用した。

このものさしは、算数だけでなく生活の場面でも、自分が「何を選び、何を決めていくのか」を意識する手立てとして用いている。生活や学習の両面で「自分で選び、決め、調整する」機会を意識的に取り入れることで、自分を知り、課題を見つけ、主体的に取り組む児童の姿を育てていく。

【ゆだねる】自分に合った学習方法で学習する。自分で選んで、決めて、調整する。
何を・だれと・どこで・どんな方法で

本単元の追究のエネルギーになるような単元の導入

比を五感で体験し、比が日常で使われているものとして感じることができる導入

- ・カラーボトルを使い、同じ量で色の割合が違うもの、量が違うが割合が同じもの2つ掲示し、色を混ぜると色の濃さが違うこと・同じことを示す。（視覚で体験）
- ・カルピスには、普通のカルピスとプレミアムカルピスがあることを示し、何がちがうかを話し合う。原液からプレミアムカルピスを作る。（味覚で体験）



単元構想（段階）	時間(目安)	学習活動 【評価】	ゆだねる支援
つかむ (1) 一斉	1	○ガイダンス単元の課題をつかむ ○2つの量の割合を、2つの数で表す カラーボトル カルピス	・ゆだねるものさしを使って、学習方法や進め方を説明し、自分で計画を立てることができるようにする。 ・いつでも見て確認できるよう単元計画を掲示する。 ・自分で単元計画を立て、ふり返りができるよう、手引書、単元計画、ふり返りがひとまとまりになったものを使う。
深める (2) 自己調整	1	○比が等しいかどうかを調べる	・時間ごとにまとめた学習のヒントが載ったお助けプリントを用意しておく。 ・じっくり用プリントと解説動画をロイロノートで共有していつでも見られるようにしておく。 ・学習につまずきを覚えた児童のために先生がヒントを教える寺子屋コーナーをつくる。(あくまで児童が一人で学習を進めることができるよう助言する) ・導入で使った色んな比の種類のカラーボトルを置き自由に遊べるようにすることで、比を視覚的に捉え体験できるようにする。
	1	○等しい2つの比の関係について調べる	
	1	○等しい比の性質を使って、小数や分数の比を整数の比にする	
		○関所プリント①	
	1	○等しい比の性質を使って、一方の量からもう一方の量を求める	
	1	○全体をきまった比に分ける	
		○まとめ 関所プリント②	・学習内容を理解しているか確認するため、難易度別関所プリントを2回行う。全員が必ず取り組む。間違えたところはもう一度取り組む。
広げる (3) 自己選択 主体的な学習	2	主体的な学習 以下のメニューから学習を発展させる。ただし、「比とその利用」の学習から離れていなければ自分が作り出した学習をしてもよい。 この学習では、他教科とつなげて学習を深めていってもよいこととする。・関所突破率 NO.1 ○○塾開講します ・一人一人に丁寧に対応します○○家庭教師 ・自学にお困りの方はお声かけくださいワークシートづくり ・プログラミングで楽しく学習 比クイズ ・目指せすてきなハーモニー・スライムづくり ・色水づくり・ぬり絵・他の教科もまとめて学習 体育館クエスト ・学校の中で使われている比を探そう!あなたの近くにも比が!学校 MAP づくり	【自分で学習を進めるために】 ・参考にできるようメニューを示す。 ・各学習のやり方をボードに掲示しておく。 ・体験学習の道具を各ブースごとに用意しておく。 ・難易度別になったプリント、解答を用意しておく。 【他者と関わるために】 ・友だちの学習がいつでも見られるようにロイロノートで共有する。 ・友だちの主体的な学習に取り組む時間をつくる。

※児童が学習のペースを自己調整して進めていくため本時は児童によって異なる。

※主体的な学習とは、自分で学習を選択して進めていく学習のことを指している。